

○大井 一弥¹

¹鈴鹿医療大薬

本邦では、65歳以上の高齢者の割合が、初めて総人口の28%を超えた。出生率の低下が続いており、これからも、少子高齢化に歯止めがかからず進行していくと考えられる。

2014年における厚生労働省の65歳以上の外来患者は、2011年の調査から、約180万人増えており、高齢者に対する医薬品適正使用の重要性が急速に高まっている。高齢者は、若年成人に比して生理機能が低下し、虚弱な状態にあるため薬剤の投与後の薬効発現にバラツキが生じやすい。

高齢者は副作用の発現率が高いことが知られているが、これは、高齢者が複数の疾患を抱えているため多剤併用を行わざるを得ない現状もある。このような背景の下、薬剤師は、高齢者薬物治療に対して病院から在宅まで関与すべきフィールドはかなり広いため、老年薬学の学問の確立も視野に入れていきたい。

本シンポジウムでは、基礎と臨床の融合的な視点から高齢者薬物治療への新たなアプローチを思考し、ポリファーマシーの問題解決に向けた薬剤師の役割について述べることとする。